

報告

大学生のライフストーリーから探る外国史学習の動機づけ(続) —擬人化から歴史へ—

Motivations for Learning Foreign-History explored through the Life-stories of University Students. A Sequel:
From Personifications of Nation to History

小川知幸^{*1}, 畑奈保美^{*2}, 安井萌^{*3}, 小川春美^{*3}, 吉原秋^{*4}, 鈴木道也^{*2},
津田拓郎^{*5}, 田村理恵^{*6}, 出村伸^{*7}, 池野健^{*8}

Tomoyuki OGAWA, Naomi HATA, Moyuru YASUI, Harumi OGAWA, Aki YOSHIHARA,
Michiya SUZUKI, Takuro TSUDA, Rie TAMURA, Shin DEMURA, Takeshi IKENO

Keywords: Foreign-History, Motivation, Life story

外国史, 動機づけ, ライフストーリー

1. はじめに

平成 30 年 (2018) に高等学校学習指導要領の改訂がおこなわれ、地理歴史科の必修科目として新たに「歴史総合」が設置された。改訂の基本方針としては、生涯にわたって能動的に学び続けることのできる「主体的・対話的で深い学び」の実現を標榜する (文部科学省 (2018; 2021))。平成 6 年 (1994) から適用された地理歴史科の「世界史 A/B」への科目構成 (平成 15 年 (2003) より必修化) から数えれば、約 25 年振りの大幅な改訂であり、令和 4 年 (2022) の高等学校第一学年から順次適用されることになる。もはや来年度である。

もとより周知のように、この改訂は平成 18 年 (2006) のいわゆる「世界史未履修問題」に端を発していると言われる。その後の調査により、未履修者は全国で約 9%、われわれの研究グループによる平成 27 年 (2015) の調査でも平均 12%におよんでいた (小川ら (2017))。また、早い段階での安井 (2011) の調査は、対象数はさほど大きくないとはいえ、学生の 4 分の 1 に迫る 23%という数字と、かれらの未履修は構造的な問題であることを指摘し、学習機会をうばわれたことに対する学生たちの「世界史を学びたかった」という痛切な声さえ拾っていた。以後、教育界の側でも高校では用語精選や一部アクティブ・ラーニングを採用した先行的な授業改善に取り組み (高大連携歴史教育研究会 (2017))、大学でも図書館を初めとして学修環境の整備を図るなど、高校での学びやすさと大学での研究教育との接続を図ってきた。

だが、それらをはたして生徒たち・学生たちの側ではどのように捉えてきたのだろうか。

2. 質問紙調査からインタビューへ

われわれの研究グループでは平成 26 年 (2014) より大学における外国史の授業改善や学びにおける高大連携の可能性を探るため、質問紙によるアンケート調査を中心として世界史学習における大学生の意識調査をおこなっ

てきた。実施 9 校から現在までに得られた回答は 1,142 件 (2021 年 6 月まで) にのぼり、学生のおよそ 6 割に外国史に対する興味や親近感が見られた。そのような意識のきっかけとしては、世界史や英語の授業、海外研修などの直接体験：それ以外のテレビ番組・映画・マンガ／アニメ・ゲームなどのメディアをつうじた間接体験＝3：7 の割合であり、それらを相互に行き来して対象への関心を次第に高めていることがうかがわれた (小川ら (2020))。同時に、調べものや討論をつうじた授業に対する好感もみられた。とはいえ、そうした「歴史好き」であっても、関心の対象がきわめて限局されていたり、現代的視点から過去を捉えることを忌避したりするなど、大学での広い学びに適応する難しさをしめす事例も析出されていた (鈴木ら (2018))。

そこで、われわれは、学生のこれまでの生活のなかで外国史学習の動機づけがどのようになされていた／いなかったのかを明らかにしようと、ライフストーリーの手法をもちいることにした。

質問形式のアンケート調査とはことなり、個別のインタビュー形式でおこなわれ、語りがトランスクリプトされるライフストーリーの手法では、ある程度の質問は準備されずとも、基本的にインタビューの自由な語りに任される。その語りの内容の信憑性・実証性は相対化され、何を語ったかよりもいかに語ったかを重視する (桜井 (2002))。もちろん、インタビュアーは何を・いつ・どこで、という最小限の事実確認だけは差し挟まざるをえないのだが、シルヴァーマン (2013; 2020) は、「記憶」というものがインタビューにより引きだされるというのは誤りで、あくまで会話に従属するものとする。したがって、それはオーラル・ヒストリー、「語られた歴史」であり、その内容は場の構成と時間的な文脈に依存する (山田・好井 (2013))。

しかし、語り手は自己の過去を踏まえて未来を展望しながら、語りのなかで自己と他者とともに承認されうる

^{*1} 東北大学、^{*2} 東洋大学、^{*3} 岩手大学、^{*4} 国際文化学科、^{*5} 北海道教育大学、^{*6} 都城工業高等専門学校、^{*7} 東北学院大学、^{*8} 日本学生支援機構

現在の「私」＝自己像を作りあげようとする。その意味では、強い当事者性にささえられた歴史実践といえるものであり、自己変容さえ伴うことがある。

東北地方と首都圏の大学生を対象としたこれまでのインタビューでは、偉人伝に比せられるマンガと高校の世界史の授業をきっかけとして外国史学習に興味を深めたと語った学生が、その起源を当初は小学校でのギリシア神話への興味としていたが、併行して進めていた英語学習が自己形成に大きな影響をあたえていたことを、語りのなかで気づくに至ったことがあった。この場合、当該学生は最終的に、外国の歴史ではなく、文化に興味があったのだと修正している。また、他にも、信頼できる教員との出会い、家族や親戚のなかでのロールモデルの存在、SNSをつうじた自己のプレゼンスへの問いなどが外国の歴史あるいは文化への関心と学習の動機づけになっていたことが明らかになった(小川ら(2021))。

このようにライフストーリーでは、小学校や未就学期の「記憶」がよみがえり、これを根幹として、メディアからの情報や高校での世界史授業・海外研修などの体験がそれを強化し、現在の大学での学びにつながったと推定することができた。しかしこの時系列は、じつは逆であってよいのではないか。われわれは過去そのものを操作することはできない。だが、「記憶」とは現在から照射されて浮かび上がるものである。

本稿では大学生のライフストーリーの続編として、前稿のように動機づけのための「諸要素」を探るというよりも、むしろ学生個人の自己像＝人格形成をささえるうえで外国史学習の意味をいま一度問うてみたい。

3. 学生インタビューの実施

さて、学生へのインタビューは、これまでに北海道教育大学3名、岩手大学6名、東洋大学3名、都城工業高等専門学校3名(以上2019年10月から12月まで)、そして尚絅学院大学4名(2021年8月)の計19名を対象に、それぞれ40分程度で実施している。いずれも、同じアンケート調査の「あなたは外国の歴史に興味がありますか」の項目に回答した学生のうち、呼びかけに応じた学生に承諾を得たうえでおこなった。ここでは、尚絅学院大学の4名の学生インタビューを取りあげる。インタビューは対面を基本としているが、当該月は新型コロナウイルス感染症の再拡大(第5波)にあたったため、1名は拡大防止対策(アクリル板越しに2メートルの距離)のうえで対面、他の3名はキャンパス封鎖によりZoomによる遠隔インタビューとなった。その影響は別途検討を要するだろうが、ここではとくに触れない。

4名の学生のうち、3名は「外国の歴史に興味がある」と回答し、1名は「どちらかといえばない」と回答している。

3-1. 母集団の傾向

選出の母集団についてまず簡単に説明しておきたい。学生たちは同校開講の「西洋の歴史」または「世界史概論」の履修生であり、学部1年生を中心に4年生までが受講している。58名からアンケートへの回答があり、外国の歴史に興味がある「ある」26名(44%)「どちらかといえばある」25名(42%)「どちらかといえばない」6名(10%)「ない」2名(4%)であった。「興味がある／どちらかといえばある」との回答をあわせれば86%になり、研究グループでのこれまでの平均6割とくらべてもかなり高い割合であった。これをA群として興味をもったきっかけを図1に示す。

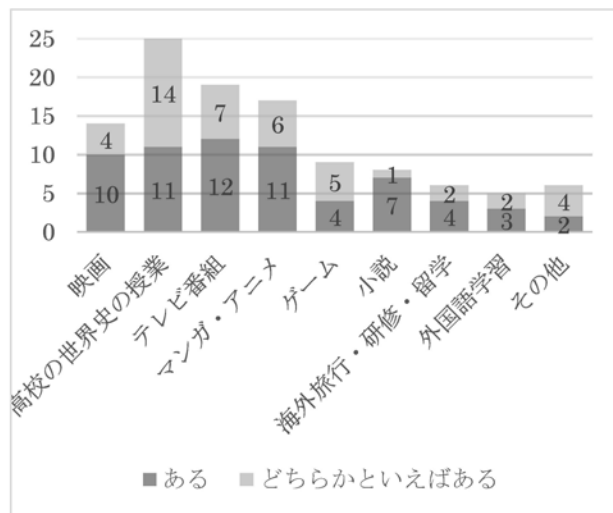


図1. 外国の歴史に興味をもったきっかけ

A群では、高校の世界史の授業が圧倒的多数であり、テレビ番組、マンガ／アニメ、映画、ゲームがこれに続く。「ある／どちらかといえばある」の割合からみると、ヴィジュアルのメディアよりも小説のようなテキストのメディアが強度において優れているようにも推測される。一方、「どちらかといえばない／ない」との回答をB群としてその理由をしめしたのが図2である。

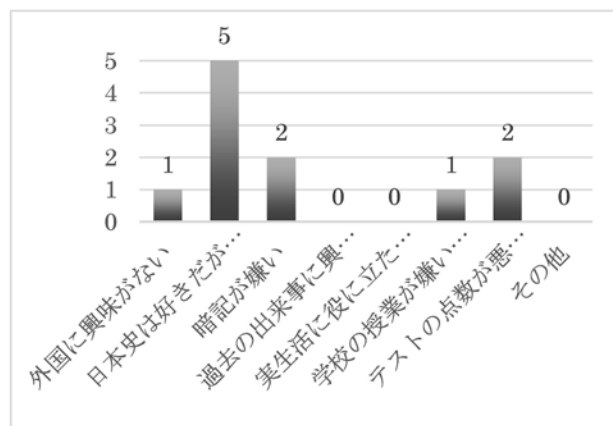


図2. 外国の歴史に興味がない理由

B 群では「日本史は好きだが外国の歴史には」との回答が半数を占めており、また「過去の出来事に興味がない」「実生活の役に立たない」とする回答は無かった。全体として学生の歴史そのものへの関心は高く、相対的に外国史への興味を押し上げたと考えられる。他方、暗記やテストの点数など、高校の授業や成績にまつわる否定的評価が外国史を遠ざけるきっかけになっていることには改めて留意せねばならない。

しかし、アンケート調査だけでは興味の度合いを測ることも相互に比較することも困難である。学生たちは、その人生のなかで外国史を学ぶことの意味をどのように捉えているのだろうか。

3-2. 外国の歴史に興味がある①

学校教育学類に在籍する1年生のK君は、外国史に興味をもちはじめた時期を中学校だと即答した。担任の先生が授業を早めに切り上げて「余談」を始めるのを楽しみにしていたという。そのテーマについても明瞭に記憶しており、それを受けて自分で調べものをするなかで、「すごく楽しいなって感じました」という物語世界に至っている。K君のストーリー領域は全体で7つ出現している(表1)。

以下、文字起こしの基本的な記号は、* : メインインタビュアー、+ : サブインタビュアー、// : 同時発話、・ : 沈黙(・につき1秒)である。

K: 中学校のあたりだったと思うんですけど、小学校の頃は世界史よりも日本史のほうに興味があったので、

* : ほー、中学校だと、基本は日本史を勉強してる頃だね。

K : はい。

* : で、中学校の頃に世界史に興味が出たきっかけというと、何か授業以外とかできっかけがあったっていう感じ？

K : 授業のそと、というか、よく担任の先生が、授業はやく切り上げて、いろんなお話してくださって、そのなかで、イスラムの問題であつたりとか、そういうことを知る機会をいただけて、それで世界史に興味をもつようになりました。(中略)

* : 歴史の先生がその、授業に入る前とかに、授業のなかで？

K : 授業のなかであつたり、あと終了直前10分前とか、お話してくださって、

* : ほー、じゃあ、それは例えばイスラムの話とかだと、今こうニュースとかで話題になっているとか、そういう話から入っていくの？ それとも教科書のなかで、これにかんしては、日本以外で考えるとこういうのがあるよ、とか、そんな感じなのかな。

K : 授業と直接結びつくようなことも、ニュースに関係することもそんなになかったですね。ちょっと、余談みたいな感じで「話変わりますけど」というふうな形で、いろんな話してくださって、

* : わりと突然、そういう話が入るの？

K : はい。(中略)

* : なるほど、じゃ、当時の先生のそういうお話のなかで、これはとくに興味深かったっていう話は何か憶えているのってありますか？

K : 今のイスラムの問題でもそうですし、日ユ同祖論とかっていうお話も聞いたことがあって、君が代の国歌がユダヤ語っていうか、あのイスラム語？ 何て言うんでしょう、

* : あー、ヘブライ、ヘブライ語？

K : あー、そうです、で読むと、もっと意味が浮かび上がってくるってみたいな話とか、あと、座るとか椅子とかっていうのもユダヤ人も伝わるみたいで、それだけでも会話になるって聞いて、

* : え、何が伝わる？

K : 椅子、椅子と座るって言葉がユダヤ人と日本人で一致していて、//+ : へー // っていう話を聞いて。

* : 日本人とユダヤ人って、言葉で共通してる場所があるっていう、そういう感じなんですか。

K : そうですね。エジプトからユダヤ人が逃げてくるって歴史のなかで、シルクロードを通ってきたって話をうかがって、その流れで日本に来たっていう、//+ : ふーん // 何か、そういう説があるっていう話を聞いて、(中略)

* : そこから、K君は、そういう話聞いて、何か自分でちょっと調べてたりしてみたって、そういうことありますか？

K : そうですね、いろいろ調べてみて、そこから広がって行って、今の問題とかも何か知ることができて、すごく楽しいなって感じました。

中学校2年と3年の担任だったというその先生の、必ずしも授業には関係しないが、掘り下げると何かにつな

表1. K君のストーリー領域の時期と内容

Story	時期	内容
1	中学2(～3)年	きっかけ/授業の余談/日ユ
2	高校3年	ゲーム/マンガ
3	高校2年/3年?	授業/グループ学習/討論
4	高校～	自国史関心薄い級友
5	小学校	戦国史/世界史/日本史/神話
6	中学校	英語の授業
7	小学校	授業の余談/歴史本

がっていることがわかるという話題提供のスタイルは、K 君に強い印象と自学の習慣をあたえたようである。そして語りは不意に現在に戻る。

＊：ほ一、今の問題っていうと、そのユダヤに関係することとか、それだけじゃなくて、てこと？

K：そうですね、最近、ゲームの影響で、ちょっと第二次世界大戦あたりのことを調べてるんですけど、それ関係でいくと、ナチス・ドイツの迫害であったりとか、そういう問題であったり、ホロコーストであったりとか、そういうちょっと闇の深い事件もしっかり調べて、自分なりに、どうすればこんなことが起こらないのか考えるようにはしてますね。

ゲームは Hearts of Iron 4 という、第二次大戦期の歴史シミュレーションであり、これを高校3年に知って以来「ハマっ」ているという。そこから知識を吸収し、調べものを進めているとのことだが、現代の問題に対して学習目標を独自に設定していることは注目に値する。おそらくは上述のユダヤ人の文化の伝播や共通性の探索とも関係するであろうことが徐々に明らかになる。

＊：高校の世界史の授業ではそういうドキュメンタリーの紹介の他に何か印象に残ってることってありますか？

K：授業の進み方が、ちょっとそれまでとは全然違っていて、アメリカ独立戦争からフランス革命とか、そういった一連の流れをグループのなかで共有するんですけど、そのときに、その出来事ごとに分かれて、そのチームで一回まとめてから、自分たちのチームに戻って、そこから流れをもう一回組み立てるっていう授業があったんですけど、//＋：ふーん// それが印象に残ってて、みんなで作ってあげていくことが楽しくて、

＊：それは先生が板書をしたりして、いま勉強してる単元のところはこういう話ですよっていうのを、説明を受けた後に、みんなでグループ分けしてっていう感じ？

K：そうです。大まかな説明をされてから、みんなで分かれていくって感じでした。

＊：ほ一、これ、組み立てるっていうのはどういうことなんですか、視点がそれぞれ違うとか。

K：そう、例えば、フランス革命の人と、アメリカ独立戦争の人に分かれて、それぞれのチームで話し合った後に、フランス革命の人と独立戦争の人、二人あわさって、共通するようなことはあるかっていうところであったりとか、あと、そこから自分で考えることは何かあるかみたいな、そういう話し合いの授業でしたね。

高校で受けた世界史の授業を、K 君は「みんなで作りあげていくことが楽しくて」と表現している。歴史とは

決定したものではなく、議論して作りあげていくものだと認識しているのではないだろうか。だとすれば、相互の差異性や共通性を認識することで、新たな歴史を生み出すことが可能だと考えているのかもしれない。

＊：やっぱり大学に入ったら世界史っていうか、そういう外国史も //K：そうですね// 歴史の授業受けたいっていうふうに思ってたってことなんですね。

K：はい。

＊：アンケートのなかでね、すごくたくさん書いてくれてて、(文章を読む)「平和とは、戦争の準備期間だと言う方もおられる。しかし、私はそのようには考えない。歴史の中で悪いことは繰り返してはならない。平和は恒久的であるべきだと考える。外国の歴史を知ることとは恒久平和の実現のための第一歩であると考える」という、やっぱり平和であるためには歴史をしっかり学ばないって、まあ裏返しではあるんだけど、全然平和じゃないっていう、そういうのが常態化しているのはみんな歴史を知らないからだ、そういうふうに、

K：そこまでは言わないんですけど、ちょっと、うーん、いっしょに過ごしている、高校のときのクラスメートとかもそうなんですけど、あんまり自分の国の歴史を知らない人が多くて、例えば、古事記とか日本書紀を知らなかったりとかして、おおまかな時代の流れもけっこう、・・頭の中で組み立てられなかったりとかして、あんまりその、興味関心が薄いなって感じてて。

＋：ふーん。(中略)

＊：そんな基本的なことも知らないのは、ちょっとまづいんじゃないの、ってそんな感じなのかな。

K：はい。僕は世界史を学んで、あの、日本史をもっと詳しく知るべきだな、って今感じてて、

＊：ほ一。

K：世界での神話の指導の仕方っていうのもあって、どこでもやっぱり、アメリカでさえも、キリスト教の聖書のことを教えていたりするんですよ。日本でそういうことしないじゃないですか。ギリシャ神話とかも、教えたりする国もあるので、日本が本当に、アマテラスとか日本の神さまいるのに、そういうことを学ばないのはちょっともったいないというか、やっぱり自分の国だから、どうやってできたのかっていうのは知っておくべきだと思って。

つまり、日本人である同級生たちが自国の歴史をよく知らないこと、とくに古代史について無知であることに慨嘆しているのである。古代史は、世界の神話の共通性とも関係しているのだという。ところで、インタビュー冒頭での K 君の「小学校の頃は世界史よりも日本史のほうに興味があったので」という語りをインタビューは

ったので楽しかったです。

＋：そういうことだと小学校のときの歴史は日本のことが中心だからあんまりっていう感じだったんですか。

Y：あんまり、あんまりでしたね。カタカナのほうが憶えるのが得意っていうのもあったんですけど、ちょっと小学校のときは、うーん、苦しい歴史の授業でした。

Yさんはこのように中学校の終わり頃に歴史に興味をわいたものの、高校では日本史と世界史Aを履修したところ「説明はやっぱり教科書通りだった」と語る。「担任の先生が、なんかすごい面白いことを言った上でテニスコートの誓いを言ってた」と言うが、それ以上の記憶を辿るのは難しいようだった。授業とは一定の距離を置きながら、他方で自身の興味の対象を追求していたようにもみえる。だが、教師があたえた歴史に取り組むさいの重要なキーワードを憶えていた。それは後述したい。

＋：なんで惹かれたんでしょう。(笑)

Y：「ヘタリア」でハマった理由は、「ヘタリア」の二次創作のほうで、「プロイセンがカッコイイ」ってなったところから始まって、調べ、あのそのやっぱ、好きになるとのめり込んでいくっていうなかで、例えばドイツでなぜヒトラーがこの上に立てたのかっていうのを調べたりとか、あと、世界史だけじゃなくて、わりと公民も好きで、選挙とか、あと刑法とかも好きだったので、やっぱりドイツって、ドイツとかプロイセンって、ワイマール憲法とか、けっこう有名で、なんでこれ作られたのに、こんなスゴイことになっちゃったんだろうっていうので興味をもって //＋：うーん // で、調べてくうちにやっぱヒトラーは悪いことをしたけど選んだのは国民だったっていうのを知ったりとかで、歴史としては酷いことをしたのはその通りなんですけど、キャラクターとしてやっぱちょっと嫌いになれなくて、・そんな感じですね。

＋：でもいろいろ調べていって、ますます面白くなっていう感じなんじゃないかな。

Y：ですね。やっぱ「ヘタリア」だけだと、偏っちゃう、たしかにその「ヘタリア」の作品自体はいろんな時代とかいろんなキャラクターをちゃんと扱ってるイメージはあるんですけど、いろんなキャラクターを引っ張ってくるから、特定のキャラクターについて深掘りされることってなかなかなくて、//＋：ふーん // なので、自分たちで知ってなると調べなきゃいけないって、でもその調べることで、その推しについてさらに知ってという感じになれるので、ちょっと楽しいですね、やっぱり。

好きなキャラクターを理解するために歴史だけでなく公民や刑法の知識なども総動員しなければならず、実際そうしてきたという。日本史の知識も基礎にしている。

Y：あの、最後らへんの授業で、その、ドイツがロシアと、その仏英戦争、仏英じゃない、違う、それはフランス、あの、

＋：独ソね。

Y：その独ソ戦争したときの話を日本史の先生から教わってて、やっぱり、裏切ったかたちになって、日本はなんでドイツはあんなことしてんの、なんで、みたいなことを聞いたときに、そのときは面白いなって思ってたんですけど、あとあとになって、なんでそんなことをしちゃったんだろうって思ってたので、それを質問できたのは、楽しいっていうか、ちょっとすっきりしました。

これは大学の授業で担当講師に質問したときの語りである。高校日本史で疑問に思っていたことが再燃し、それがある程度「腑に落ちた」心地よさであろう。ところで、このような積極性をしめすYさんだが、「ヘタリア」との出会いの背景は意外にも消極的なものであったらしい。

＊：最初にその「ヘタリア」を知ったきっかけみたいなものってなんかあるんですか？ 偶然テレビで観たとか、そういう感じですか？

Y：えっと、当時所属してた美術部の友達が「これ、いいよ」ってオススメしてくれて、それで観た感じですね。(中略)

＊：ほー。

Y：それとか、あと、そのキャラクターについて絵を描いて教えてくれたりとかで、興味をもちました。

＋：さすが美術部。

Y：ほんと、ちょっとあれがなければたぶん「ヘタリア」に行ってません。

＊：それは高校だけ。

Y：あ、中学校です。

＊：中学校か。中学校のとき、美術部の友達が、アニメで面白いのやってるよっていうのをこう、絵を描きな

表2. Yさんのストーリー領域の時期と内容

Story	時期	内容
1	中学2年/3年	きっかけ/ヘタリア
2	小学校	苦しい歴史の授業
3	高校	日本史+世界史A
4	不明(中学/高校?)	二次創作/歴史を調べる
5	高校(1年/2年?)	テニスコートの誓い
6	中学校	ヘタリア知るきっかけ
7	高校	日本史の授業
8	高校	ヘタリア/犯罪心理学
9	(小学校)	歴史をなぜやらねば

がら、絵を付けて、教えてくれた。

Y：ですね。ちょうど絵を描いてたときに、私がチラって見たとき、何このキャラクターって、ちょっと面白そうだねって訊いて、//*：ほー // で、これはイギリスっていうキャラクターでちょっと今の推しなんだけど、っていう話から、なんでイギリスなのっていう感じで話題が広がってって感じです。

*：へー、で、Yさんは、イギリスが好きなのはなんでなの、って話を訊いたわけ？

Y：えーと、「ヘタリア」が国の擬人化っていうのを知らなくて、//*：あー // なんでイギリスがイギリスなのみたいな、その絵を見て、なんでこれがイギリスなのって話から、つながっていきました。

*：あー、その国が擬人化されてる、そういうアニメなんだ、っていう話になっていったってことですか？

Y：になりましたね。それで、ほんとに面白いから、もうマジで観てっていうの言われて、そんなに推されるならって思って観ました。（中略）

*：へー、その前に、「ヘタリア」のアニメにハマる前に、イギリスとか他の国とか、興味があるなっていうことはとくになかったんですか？

Y：あー、民族衣装とかが好きだな、っとかいうので調べてたってことはあるんですけど、ここまで本格的っていうか、好きってなったのは「ヘタリア」に出逢ってからですね。

*：そうなんですか。なるほど。美術部に入ってたっていうのは、（中略）

Y：あの、ほんと、純粹に、入りたい部活がなくて、//

*：えー // 「ヘタリア」勧めてくれた人じゃないんですけど、小学校のときから仲いい親友が美術部入って言ったから、いいや入ろうって入った感じです。

*：そうなんですか。じゃあ、絵を描きたいっていうのがとくにあったわけじゃなくて、いっしょにいたほうが安心だな、っていう感じですか。

Y：そうですね。私の中学校自体が、文化部もすごいガッツガッツやってる、文化部、吹奏楽なんですけど、ガッツガッツやってるし、//*：ほー // 運動部もすごいガッツガッツやあって、どこ行ってもたぶん生きて帰れないな、と思ったことですね。

*：そんな。+：（笑）

Y：それだったら美術部か学芸部ってあったんですけど、学芸部か美術部だったら親友が美術部行くから美術部に、っていう形で美術部に入りました。（中略）

*：なるほど、そうなんだ。・じゃあ、とりあえず避難するには美術部がよさそうだって、

Y：（笑）そう、そうですね。そこで避難した先で仲良くなった友達に教えてもらったって感じです。

言うなれば追い詰められた状況で、Yさんは「ヘタリア」に出逢った。そこで方向づけられ、彼女の追究が始まる。その後の歴史知識の習得には、SNS上のコミュニティへの参加が重要な役割をはたしていたらしい。

Y：ほんと、「ヘタリア」の二次創作をしてる方々ってすごい詳しい人が多くって、例えばドイツの歴史だけじゃなくて、ドイツの経済歴史も詳しい人がいたりとかで、二次創作を見るさいに、その詳しいことを、その知識がわりとこう、ちょくちょくばらまかれてるのを全部回収したいなと思って調べてたのもありますね。

*：すごいね、それは。二次創作っていうのは、そのコミケとかに行行って買うとかじゃなくて？

Y：あ、それもですし、例えば3DモデルのMMDっていうのがあって、それをやるさいにちょっとストーリーじみた形にして、動画を作って、誕生日っていうか建国記念日とかに上げるとかいうので、そういうのであったりとかですね。

*：へー、すごいな、なんだか。（笑）ネットでも見ることはできるっていうことなんですね。

Y：あ、できます。

*：全部集めたいっていう、強い衝動が沸き起こってきたんですか。

Y：ですね。やっぱストーリーじみているので全部を理解して、理解した上でもっかい観たいな、と思ったので、細かい演出とかも、こういうのがあるんじゃないかってのを全部理解したいって思ったので調べました。

SNS上で時空間をこえて自由に参加することができるいわばテーマ・コミュニティを、われわれはこれまで認識していなかった。そこでは、ネットの「住人」が発表すること・表現することがコミュニティの存在をささえていると考えられる。各自が能動的であることが必要である。このようなコミュニティへの参加は、あるいは直接体験と同程度の強度をもっているのかもしれない。

さて、それでは、Yさんは歴史の学び方をどのように認識しているのだろうか。それは高校日本史の授業についての語りのなかに現れる。

*：グループ学習とか、そういうのをとくにやったわけじゃない。

Y：とくにやってないですね。あー、でも先生から、例えば前回やった授業の人が出てくるときとかには、この人何やった人か誰かわかる？ って訊いたりとか、その日本史がすごい得意な人に訊いたりとか、っていうのはありましたね。（中略）

*：なるほど、それだと、前回の授業の内容をちゃんと憶えてるかという復習ができる。

Y: あ、できる感じですね。あと、ほんとにつながりのない感じで、けっこう前に出た人の話とかも、

*: ほー。

Y: だから、あれです、日本史のときは、例えば徳川家とかの話になったら、これ十何代の人だけど、何個前でこれやった人誰だっけっていうのを訊いたりとかけっこうあって、あと総理大臣とかもあったりとかしてましたね。

*: なるほど、そんな場当たりのじゃなくて、順番ちゃんと憶えているかどうかというのを確認できるような質問だったっていうことですね。

Y: ですね。ほんとに、なんか、「歴史はつながって憶えろ」ってすごい言われてたので。

この「記憶」がしめすのは、Yさんの歴史学習にこの実践メソッドが活かしているということである。

しかしながら、彼女は歴史ではなく、心理学類に在籍している。なぜなのか。

*: そんなに歴史大好きな人が心理学に進もうと思った、なんかこう、理由ってあるんですか？

Y: えーっと、あれですね、なんて言うんだろう、ちょっと志望理由と違うんですけど、(笑) もともとすごい未解決事件が大好きで、//*: ほー // それでそこからどうして事件を起こしたんだろうっていうのに興味がわいて、ちょうど、その犯罪心理学っていうのを知ってから、あ、これ面白そうってなって、そんな感じですね。

(中略) それでちょっとやっぱり、なんだろう、で、もともと心理学もやりたい、ってもう、世界史も好きっていう感じだったので、ちょうどやっぱり離れちゃった時期に、大学決めなさいって時期が重なったので、心理学も、どっちも好きだったので取りました。(中略)

*: おー、それは心理学で読み解いていくと解決の道筋が見えてきそうっていう、そんな事件も多いのかな。

Y: うーん、どちらかというともたんに防げたんじゃないかな、とか、あと、なんでこの事件を起こしたのかっていうのを考察してみたいなっていうのがあった感じですね。

*: なるほど。そうか、じゃあ、Yさんは、因果関係を追かけて、合理的な説明を試みるっていうことにも共通して関心があるっていうことなのかな、

Y: 言われてみれば、そういう感じ、そういう傾向がちょっとあるかなって思えますね。

インタビュアーはこのとき気づいておらず、また、Yさんも咄嗟に話をあわせたようにみえる。だが、「ヘタリア」の構想に照らしてみれば、彼女のいう心理学での考察と歴史的な追究とはじつは共通点が多いのである。

それはこうである。「ヘタリア」での擬人化とは、近代国家の国民性にもとづくカリカチュアなどではない。そうではなく、細かな歴史的事実にもとづき、いま・ここにある一個の人格として表現されている。したがって、その振る舞いは(ヴィジュアル的な表現を含めて)どうしてもそうになってしまう、そうせざるをえないような一つの精神をそなえた人物像を形づくっているのである。

だとすれば、これを、ある事件を引きおこした人物の行為とその心理をつうじて、読み解くことは不可能ではないだろう。Yさんの学びの選択はここで一致する。

Y: えー、あれですね、ほんとに世界史とか歴史が嫌いな人たちにとりあえずもう「ヘタリア」をバンバン勧めたいですね。

+: なるほど。(笑)「ヘタリア」いいかな。

Y: 私も最初、(小学校の頃は)日本史も歴史も苦手だったので、//*: ほー // 興味もないっていうか、なんでやんなきゃいけないの、みないなのはあったので、それがある人は推しを作ってやるのもありなんじゃないかな、っていうのは思いますね。

3-4. 外国の歴史に興味がある③

健康栄養学類1年のTさんは同じくアニメの「ヘタリア」をきっかけとして外国史に興味をもったというが、その出逢いは高校卒業後であったため、まだ半年にも満たない。友人の勧めで、「なんか絶対ハマると思うよーって言われてて、で、それで時間があったので、観てみようかなって感じですね」と答えている。

「推し」(＝お気に入り)はイギリスであり、「なんかいつつも、すごいツンツンした性格なんですけど、元植民地だったアメリカとかカナダとかに対しては甘かったりとか、そういうところが可愛い」という。また、「『ヘタリア』のなかで、けっこう説明とか、ナレーションで説明されたりとかするんで、大まかなことは分かったりとかするので」、調べものなどはとくにしていらないらしい。

高校では世界史を履修していたものの、授業の印象についてはあまり語らず、「とにかく覚えることがいっぱい」、精々「産業革命」という単語を思いだすのみ、とのことであった。一方、日本史では「武士の名前とか覚えるの好きでした」と答えている。したがって、まさに大学の、現在において初めて外国の歴史に興味を抱いていると推定される。だが、その興味の度合いは、このインタビュー依頼に応じるほどでもあり、「西洋の歴史」の受講にも愉しさを感じているようであった。

*: 先生の授業は面白かったですか？

T: あー、面白かったです。

＋：「ヘタリア」で出てきたことって出てきました？

T：あ、出てきました。（笑）

T：最後の方に「ヘタリア」の主な時代が、第二次世界大戦ぐらいで連合国と枢軸国に分かれてるあたりだったんですけど、その話とか、あとは、私の推しがかかわってる、（アメリカ）独立戦争の話とかは面白かったです。（中略）

＋：古い時代からずっとやっちゃったからその辺はね、あんまり出てこなかったですね。

T：あー、けどもう、地図とかにイングランドって出てきたときは、ほんとにあの、嬉しくて、（笑）

履修する語学の授業にも総じて満足し、また他にも、海外旅行の夢を膨らませている。もし海外に行けるとすれば、まずイギリスに行き、「ビッグベンを眺めながら紅茶飲みたいです。（笑）」という。「ヘタリア」のキャラクターとの同化、というよりもむしろ、そのキャラクターの視線をつうじて、歴史という新たな世界の「窓」を開きはじめていると言えるだろう。

Tさんは中学3年のときにすでに病院勤務の管理栄養士をめざしていたという。職業志向の高い学生である。進学した高校では一般教養に類する授業数もごく限られていたらしい。しかし、優れた対人共感性があり、資格取得と就職に向けて一意専心するなかでも、「ヘタリア」との邂逅により、外国史学習の機会を自発的に作り出したのである。

3-5. 外国の歴史に興味がどちらかといえない

Tさんと同じく健康栄養学類1年のCさんは、アンケート調査に「日本史は好きだが外国の歴史には興味がない」と回答した一人である。そのきっかけは小学5年生の頃に社会見学で□□城に行き、「戦国時代とか面白いな」と思いはじめたことだという。武将よりも戦国時代全般に興味をわき、母親とNHKの大河ドラマを鑑賞したり、その時代の人物を題材にしたマンガを読んだりするというが、マンガについては母親のほうが詳しいようである。だから家庭内での影響でもあるのだろう。先ごろも一緒に、「近場だと□□城（県内の古城）とか行きました」と答えている。

高校では世界史を選択したが「前半ぐらいまでしか教科書が終えてなくて」、中国古代史の記憶は残っているものの、授業が駆け足だったと歎く。そのため、世界史への知識不足を感じていたように見受けられた。Cさんもまた病院勤務の管理栄養士をめざしている。進学した高校は調理科があり、専門の授業が多かったそうである。大学での「西洋の歴史」の受講は敢えてそのような思いからであったのだろう。

＊：先生の授業をとろうと思ったきっかけとかってあるんですか？

C：きっかけはそうですね、やっぱり高校とかで、西洋のほうの歴史はあんまり詳しくやってなかったんで、ぜひ大学で受講してみたいなと思ひまして。

そうするうちに、外国の歴史にも興味がわいてきたという。ネットを活用し、歴史のさまざまなテーマに触れている。

C：あ、でも最近、YouTubeのほうの動画等で、いろんな国の歴史を、ちょっと最近拝見させていただいて、少し興味が。（中略）

＊：例えばどんな国の話ですか？

C：最近だと、大学で、「西洋の歴史」を学習させていただいて、ユダヤ人とその戦争の関係、ユダヤ人迫害への進展と謎、あと他の、・けっこうマイナー、あんまり歴史が知られてないような国の内戦とか、そういう関係とかも、すごい興味がわいて、最近見ってます。

（中略）

C：そうですね、文化とか、あと、YouTube関連なんですけど、ちょっと前に、けっこう中国、いろいろあったじゃないですか。なんていうか、中国内で、もめ事というか、そういうところにも、ちょっと最近、興味がありまして。

＊：中国内のもめ事っていうと、文化大革命とか、

C：そうそう、それです。そこらへんのやつで、政治的なこととかも日本とは違うので、そこも面白くなって。

Cさんは「歴史は、好きです」と明言する。小学校の授業や家族とともに日本史にかんする実体験をかきねてきた。それだけに、外国史に対しては幾分不十分さを感じたのだろう。大学で授業を受け、ネットでその知識を収集し、関心を深め始めている。海外に行つてピラミッドや世界遺産や万里の長城なども見てみたいという。人生において「外国の」歴史を学ぶことにどれほどの意味があるかないかはまだわからない。けれども、それに対する興味は開かれている、と言えるかもしれない。

4. おわりに

以上のように、K君は近代国家間の事件や紛争を考察するなかで、平和への希求から、人類や民族の共通性を探るための望みが、歴史、とくに古代史にあるのではないかと推測するに至った。歴史は未来に向けて作りだすことができると推測しているのである。また、Yさんは逃げ場のない状況から一転、近代国家を擬人化したキャラクターに出逢い、これを生きた一つの人格と見做し、その精神や行動を探るために外国史を精力的に学んだ。なぜ歴史を学ばねばならないかという疑問に、納得のい

く解答をみずから見出したのである。本人の志向と、ネット上のテーマ・コミュニティへの参加がこれをうながした。そのさい併せて、K君にもYさんにも、授業での教師の取り組みやキーワードが、文字通り錠前を開く鍵のようにして活用されていた。また、Tさんは、そのとば口に立っている。

現在の「私」にとって外国の歴史を学ぶことでしか解決できないとおもわれる、生きるうえでの課題が内在化されていること、そしてそれを解き明かすための実践メソッドが手がかりとして伝達されていることが重要なのである。それにより初めて生徒・学生たちは能動性を獲得できるのだろう。教師が巧みに知識を伝達し、過去からの発展や現在と過去の継続・断絶などを伝授することは必要であるが、それだけでは十分でない。

Cさんがインタビューの最後に質問したことがあった。

＊：訊きたいこととか、//C：ああ // もしあれば。

C：そう、なんか世界史とかって、けっこうそういうメジャーじゃない国とかもとあげることあるんですか。こう、

＋：うーん、いや、もちろんあるんですけどね、

咄嗟に学習指導法のテクニカルな理由を挙げてその場をしのいだが、われわれはこの質問の真意をくみ取れたとは決して考えていない。これは「引っかけ」、すなわち、語りの意味がよく理解できず、ときに何年もかけて格闘したあげく、ようやく腑に落ちることがあるもの（山田・好井（2013））である。

大国にはストーリーがあるが、小国にはないというのか。メジャー／マイナーであることの判断はいったい何にもとづくのか。マイナーには意味がないのか。世界史とは何を語り、私たちに何をあたえてくれるのか。

彼女のこの問いは、あたかもポリフォニーのように、そう語っているように聞こえるのである。

参考資料・文献

- 文部科学省（2018; 2021）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説（令和3年8月一部改訂）、
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm（2021年11月閲覧）
高大連携歴史教育研究会編（2021）歴史総合 Q&A—歴史総合の授業のつくりかた—、
<https://kodairekikyo.org/2021/07/28/post-0043/>（2021年11月閲覧）
小川知幸・安井萌・小川春美・吉原秋・鈴木道也・津田拓郎・田村理恵・畑奈保美・出村伸・池野健
（2021）大学生のライフストーリーから探る外国史

学習の動機づけ、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第23号、65－74

小川知幸・安井萌・小川春美・吉原秋・鈴木道也・津田拓郎・田村理恵・畑奈保美・出村伸・池野健

（2020）外国史学習の動機づけに関するアンケート調査と分析—岩手県を中心に—、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第22号、57－63

デイヴィッド・シルヴァーマン（渡辺忠温訳）（2013; 2020）良質な質的研究のための、かなり挑発的でとても実践的な本、新曜社

鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萌・小川知幸・畑奈保美・出村伸・津田拓郎・池野健（2018）大学における世界史教育の現状と課題（2）—世界史学習に関する大学生たちの意識調査—、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第20号、47－56

吉原秋・小川春美・マーハー パトリック・鈴木道也・安井萌・小川知幸・畑奈保美・出村伸・津田拓郎・池野健（2018）世界史教育と外国史教育との連携・協働のための予備調査報告、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第20号、57－61

小川知幸・吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萌・畑奈保美・津田拓郎（2017）高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第19号、67－73

高大連携歴史教育研究会（2017）高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）
https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2020/08/selection_plan_2017.pdf（2021年11月閲覧）

桜井厚・石川良子編（2015）ライフストーリー研究に何ができるか—対話的構築主義の批判的継承—、新曜社

野上元・小林多寿子編著（2015）歴史と向き合う社会学—資料・表象・経験—、ミネルヴァ書房

山田富秋・好井裕明編（2013）語りが拓く地平—ライフストーリーの新展開—、せりか書房

桜井厚（2012）ライフストーリー論（現代社会学ライブラリー7）、弘文堂

安井萌（2011）世界史未履修問題と岩手大学生—アンケート調査によりながら—、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第10号、23－35

桜井厚（2002）インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—、せりか書房

※本稿は2019～2022年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「学習者の視点から探る世界史学習の内発的動機づけ—国際的志向性の観点から—」（研究課題領域番号19K02878、研究代表者・安井もゆる）による成果の一部である。